

松本清張記念館

◆館報◆

2020.4
第63号

彼はワシントン・ポストをひろげて、記事の部分を指で示した。
“Bush Says: Fall of Shah Due to US's Failures”
という文字である。



『白と黒の革命』昭和54（1979）年 文藝春秋

『白と黒の革命』は、昭和54（1979）年「文藝春秋」6～12月号に掲載された。

現在入手しやすい本

『白と黒の革命』小学館

『松本清張全集』49巻 文藝春秋

目次

第41回研究発表会について……………	2
SEICHO cafe 情報ほか……………	5
展示品紹介……………	6
点描 作品の舞台を訪ねて……………	6
『松本清張研究』第21号発刊……………	7
友の会活動報告……………	7
トピックス……………	8

作品紹介

作家の山上は、ニューヨークでペルシア絨毯の商人をしているエドモンド・ハムザビから、シャー・パーレビのイラン追放について、驚くべき見解を聞く。イラン革命は、石油値上げに走るシャーへの懲罰をアメリカのメジャーが意図しCIAが画策した結果起こったというのだ。

興味をもった山上は、情報収集のためニューヨークへ赴くが、再会したハムザビは冷淡で、思うような取材ができない。しかし、最後に面会したイランの王族の一人であるアリ・モスタファアビから、新たな情報を得る。

山上はイランの首都・テヘラン行きを決意した。シャーの「白い革命」時代からホメイニの「黒い革命」によって変化したイランでは、いまにも「何が起きる」予感で満ちていた。そしてついに山上の身にも危険が――

一九七八年に清張がイランを訪問した際に起こった暴動「血の金曜日」に触発され書いた作品が本作「白と黒の革命」である。

現在に至るまで火種が燻り続けるイランの歴史の一端が、見事に描き出されている。

（学芸員 柳原暁子）

講演

清張作品の中の女性たち



講師

長尾 龍一

東京大学名誉教授

私と清張・小倉とのかかわり

私は文学や清張の専門家ではありませんので、なぜ私のような素人が今回お話をさせていただくことになったのか、怪訝に思われる方もいらっしゃるでしょう。私は普段から、あまり自分を語るのとは興味がなく、ことごとくお話を聞いてくださる方が、少しだけお話しします。

私の母方の曾祖父である杉山貞(1843-1913)は、小倉女学校の創設者で初代校長でした。「或る『小倉日記』伝」などの作品に、アマチュア史家として名前が出てくる人物です。曾祖父の没年から考えても、1909年生れの清張先生は文献等で後に曾祖父のことをお知りになったようです。私自身も子供の頃に小倉の丘の上の家で過ごした記憶がありますし、現在でも小倉周辺に杉山の子孫たちが暮らしています。

その杉山貞の孫である私の母は、1909年の早生まれでしたから、清張先生と同じ天神島小学校に二つ上の学年で通ったこととなります(本当は清張先生も早生まれだったようです)。ただし当時は学年下の男の子との接点もなかったようで、

母に尋ねてみても、残念ながら幼い清張先生に関する記憶はありませんでした。

清張の多作を支えるもの

その母から聞いた話の中で、戦後東京で小倉関係者の集まりがあった時に清張先生の噂話が出て、誰かが「あんな沢山のものを書いているんだから、松本清張株式会社」という下請け工場があつて、そこに書かせてやるのよ」と言っていたそうです。私は今でもそういう俗説を耳にすると、「そんなことは絶対にない」と断固否定しております。資料を集める際の良いアシスタントがいたのは事実でしょうが、執筆を下請けに出していたのであれば、あれほど質の高い作品を書けるはずがないと私は感じています。

一般的に「多作は駄作」と言われることもあるでしょうが、清張先生の場合にはそれが当てはまらないと思います。その多作を支えているのが、けた外れの構想力・調査能力・表現能力です。我われ文化系の研究者も文章を書くという点では作家に近いところがありますが、適切な表現がありそうでなかなか見つからずに苦労することが私自身にもよくあります。清張先生のようにさらさらと書いてきちんと叙述できるのは、やはり特別な才能だと痛感いたします。例えば作品にちよつと登場するだけの人物を紹介するにしても、非常に簡潔な文章表現だけで、その人相や風体、雰囲気までも的確に描いているのです。この叙述力が、構想力や独自に身につけた基礎学力(語学力や歴史的知識)などと合わさって、驚異的な作品の数々が生み出されたのだと思います。

清張の『女殺し』

清張先生は私の両親などと同世代ですので、やはり日本の古

い家族制度がまだバックグラウンドにある時代に青年時代をすごしました。作品の中に戦後民主主義の家庭観とは異なる部分が含まれていることも否定できないでしょう。

例えば、何の罪もない美しい女性が身勝手な男に殺される話がたくさん出てきます。そのような作品の背景には、腕力や経済力で圧倒的に優位な男に対する女性の従属という構造が前提としてあるわけですが、当時は現実の世界がそうだったのだ、その反映でしょう。よく冗談で「結婚と辞書の共通点」として、戦前の旧仮名遣いでは「愛に始まり腕力に終る」、新仮名遣いとなった戦後には「愛に始まり腕力に終る」と言われています。これらはいずれも男の暴虐を示したものです。

私が最近読んだ清張作品の中で、印象に残っている『女殺し』の話をいくつか挙げてみましょう。

例えば『虎』という作品に登場するお梅は鯉のぼり問屋の女中でしたが、腕のいい渡りの職人を引き留めたい店主の思惑によつて、その職人と結婚させられます。お梅は夫に甲斐甲斐しく尽くしますが、それを足手まといに感じた夫は彼女を殺して江戸に出走します。このように、ある目的のために女性が利用され、用済みや邪魔になると抹殺されるというパターンは、現代社会の企業等を舞台とした清張作品にも通じる部分があると思います。

また、『西海道談綺』の冒頭では、主人公の武士は妻の志津が自分の上司と密通していることを知り、その上司を斬り殺したうえ、志津と逐電するように見せかけて、彼女も鉱山の廢坑に突き落として殺してしまいます。しかし実は志津は生き延びており、のちに名前や容姿を変えて再登場します。そして復讐の鬼と化した彼女も最後には自滅してしまいます。このあたりの描写は特に壮絶であり、読者としては「もう少し主人公に志津への償いの態度があつてもいいのに」と感じるほどで、釈然としなるところもあります。

他にも、小倉の文学青年グループを素材とした作品である『表象詩人』で、陶器会社のエリート社員として東京から赴任してきた男の妻である明子が登場します。彼女をめぐつて男たちの間にトラブルが生じ、突如彼女は殺されてしまいます。こうした舞台背景や登場人物の描写、作中の詩などにも、清張先生

自身の青年期の体験がモチーフになったことが窺われます。また私の大学の同級生で東洋陶器に就職し、定年後も小倉に住んでいる友人がいますので、彼を通じていろいろと訊いてみましたが、この作品のモデルとなったと思われる人物や事件等にはたどりつけませんでした。

さまざまな女性の描き方

作家の腕の見せどころの一つとして、女性の描き方が挙げられるでしょう。そしてこれは清張先生自身も語っていることです。『推理小説殺人小説』という構造があります。それらをもまえると、ミステリーの大家である清張先生が『女殺し』の場面を多く描いたのは、むしろ当然なことのような気がします。ですから、こうした描写だけを拾い上げて、『清張の女性観』などとしてひとくくりに語ってしまうのは間違いだと思います。

他方で、『鷗外の婢』のモトのように、不遇・不運な女性の生涯を同情的に描いた清張作品も多くあります。つまり、清張先生は小説の中で簡単に女性を殺してしまうような作家だったわけではなく、それだけ女性の運命というものを内在的に見つめていたのだと思います。

加えて、「見送つて」という作品の、厳しい姑に忍従しながら育て上げた娘の結婚の日に独立宣言をする未亡人基子、「火の路」で指導教授に疎外されながらも飛鳥文化の起源をヘルシアに求める研究者の通子、「青い描点」で同僚男性と協力して女流作家殺人事件を解明していく新米編集者の典子のように、独立自尊のヒロインも多く描いています。彼女らに共通して認められるのは、男社会から自らを解放する、あるいは従来の女性の地位を覆そうとするような姿勢です。清張先生は女性誌にもよく執筆していたため、やはり読者に向けてこうした知的で新しい女性像を意識して描くことにも長けていたのではないのでしょうか。

そして『砂漠の塩』や『波の塔』は、いずれも不倫を扱った悲劇的な終末へといたる作品ではありますが、そこには現実的な婚姻制度を破壊する純粋な愛が描かれているように私は感じています。

おわりに

いずれにしても、作中のこうした女性の描き方は、そのまま作家の女性観を示すものではないでしょう。かといって、時代や世相、そして作家や読者の実生活から完全に切り離されたものでもないはず。私自身も今回あらためて様々な清張作品を読んでみて、女性を描いた作品の数、そして描き方の類型の多さを再認識しました。いろいろと述べてみましたが、あくまで読者の感想としてとらえていただけますと幸いです。何しろ到底読み切れないくらい、沢山の作品があるのですから、簡単に割り切らずに、読めるだけ読んでみることをお勧めします。

研究発表

松本清張文学の韓国における翻訳現況と特徴



発表者・研究代表者
金 宰 鉉
韓国・慶北大学校教授

要旨

松本清張は韓国で最も人気を博し、おそらく韓国語に翻訳された数でも最多となる日本人作家と言えよう。しかし韓国内では依然として清張文学関連の研究は少なく、翻訳刊行された作品の正確な書誌的調査は行われていない。こうした現状をふまえて本研究では、まず韓国における清張文学の翻訳状

況について、実物確認による正確な調査によって、翻訳作品の目録を作成した。さらに清張文学の受容実態を把握するため、韓国語に翻訳される過程で現れた特徴を分析した。同時にそれらを韓国の著作権導入過程や翻訳関連の出版文化の歴史、そして韓国の社会的情勢等とも照らし合わせながら検討した。こうした総体的な研究を通して、清張文学が韓国でどのように受容され、消耗され、要求され、変容されたかを明らかにすることを目標とした。

清張文学の韓国語訳は韓国での外国語著作物に対する著作権法の運用や整備とも深く関係しており、おおむね外国語著作物に関連する著作権法未導入期（1986年以前）、著作権法導入期（1987～1994年）、著作権法定着期（1995年以降）の三期に区分けすることができる。それぞれの時期によって翻訳対象、出版社、翻訳家の様子が大きく様変わりしていく。

○著作権法未導入期（1986年以前）

清張作品の翻訳は1960年の『或る小倉日記』伝から始まり、この期間に翻訳された作品は計74編に及ぶ。

清張の代表作と言える「点と線」は早くも1961年に最初の翻訳が登場するが、大人気を博した結果、以降この期間中だけでも計18回刊行されている。その内訳として、計8名の翻訳者により、計13の出版社から刊行されていることが確認できた。しかし、それらの大半は原作から直接翻訳したのではなく、他社翻訳本をそのまま再刊行したものや、ごく一部の文章修正を加えたもの、そしてタイトルや訳者名だけを変えるなどしたものである。「例を挙げると「ホステスの情死」「ホステスの狩人」「赤い薔薇の情死現場」「海辺の情死」、これらはいずれも「点と線」翻訳本のタイトルであり、中身もほぼ同じものであると言えるが、出版社や訳者名、表紙デザイン等が異なっている。

こうしたタイトル改変は他の清張作品にも認められ、「地の骨」なら「暗黒大学」や「蝕まれた象牙の塔」といったタイトルで翻訳刊行されている。そこには、腐敗した大学教授や入試をめぐる不正といった作品の内容を、読者（本を購入しようとする

者に分かりやすく伝達しようとする出版側の意図が窺われる。ただしこのような例は少数派であり、既存の翻訳とは異なるものであるかのように偽装するためにあえて別のタイトルを掲げたものがほとんどと言える。

例えばこの時期に刊行された「ゼロの焦点」の翻訳本として、「霧の中の最後の証人・松本清張の長編推理小説」と「妻の追跡・最高ベストセラー推理小説を翻案した作品」とタイトルに表記された二種類のものが確認できたが、いずれも目次やページ数、内容まで同一であり、表紙と作訳者名および出版社名だけが異なっている。つまり、表紙のみを見て購入した読者が同じ自身の本をつかまされる事態も生じたと考えられ、悪質なものである。

このように、同一の清張作品を複数の出版社がそれぞれ別のタイトルで競争的に刊行したことが、著作権法未導入期における特に顕著な現象であり、その背景として著作権保護制度の未整備や韓国での清張の二大人気というものが浮き彫りになる。

○著作権法導入期(1987~1994年)

韓国は1987年に万国著作権条約(UCC)に正式に加入し、これによって国内の著作権法が全面改定され、外国人の著作物が法的に保護されることになる。こうした法的措置によって、「犯罪の回送」等、日本の出版社と著作権契約を結んだうえで翻訳刊行されたものが登場し始める。しかし当時の著作権法は、1987年以前に既刊行済の外国人著作物については遡及して保護する対象としておらず、それらは継続的に流通されることとなった。

この期間中に翻訳刊行された清張作品は計18編であり、書籍数では22冊になるが、その大半は再版や作者名を変えて刊行されたものである。新たに翻訳された作品としては、前述の「犯罪の回送」のほか、「小説東京帝国大学」「北の詩人」「天保図録」「網」「徳川家康」といったものがある。

この時期の翻訳本にも、原作からは推測が困難なほどに全

く別のタイトルが与えられたケースも多く見られる。例えば、「声」は「接地線」、「顔」は「脚本人生」、「地の指」は「誘惑の罟」、「眼の壁」は「特ダネを狙う社会部記者」といった具合である。

またこの時期の特徴として、清張作品のなかでも政治問題を扱ったものが集中的に翻訳されたことが挙げられる。ちょうど韓国が政治的激動期を迎えた頃であり、1987年6月抗争の結果、国民の直接選挙によって大統領を選ぶこととなったため、世の中に政治や大権(大統領)に対する熱気が非常に高まっていたのである。こうした時代を反映し、選挙を背景とした推理小説「網」が「消えた選挙参謀」として翻訳刊行されたのは理解できる。しかしいくらか政治や権力闘争をテーマとした作品であるとはいえず、時代小説「天保図録」が「誰も大権が取れなかった」とのタイトルで、さらには伝記である「徳川家康までもが、その流れに便乗するように翻訳刊行されているあたりは、いささか強引な印象を受ける。

○著作権法定着期(1995年以降)

1995年以降になると、版權契約に基づいて刊行されるシステムが定着し、資本力の強い大手出版社によって零細出版社は淘汰されていく。それとともに翻訳者の交替も進み、日本文学を専攻した者や日本留学経験者が多く登場するようになる。彼らは日本語と韓国語の双方に熟達しており、正確な翻訳や読者の理解を特に重視する傾向がある。

また従来と比較すると、一部の人気作ばかりを競争的に翻訳刊行することはなくなり、それまで翻訳されていなかった作品も含め、清張の多様な文学ジャンルを体系的に紹介するものが台頭するようになる。2012年以降、ブック・スピアとモビーディックの大手二社が共同企画した「清張ワールド」シリーズがその典型である。両社は、それまで清張が韓国では推理小説作家としてのみ認識されてきたことを指摘し、彼が「日本の黒い霧」や「昭和史発掘」といったノンフィクション作品を数多く書いた優れた歴史家でもあることを読者に訴えようとした。

そうした認識と方針のもと、「清張ワールド」シリーズは両社で版型やデザインを統一して刊行された。ブック・スピア社は清張の長編小説を主として担当したが、他にも「黒い手帖」や「小説

日本芸譚」といった作品も翻訳している。そしてモビーディック社は主に「張込み」や「或る小倉日記」伝、「駅路」といった短編集や「日本の黒い霧」などのノンフィクション作品を翻訳刊行している。この企画によって松本清張の全体像がようやく浮き彫りになったのである。

そしてこの時期の特徴として注目すべきは、各刊行物において原著者である松本清張についても詳細に説明されるようになったことである。また専門家や翻訳者による解説も載せられ、作品が包含する社会的な意味や意義について読者が理解できるような工夫がなされている。さらに翻訳者の経歴についても、従前と比べて格段に詳細に紹介されるようになった。著作権法の定着によって、翻訳者の地位が飛躍的に向上し、彼らが自己アイデンティティを持つようになったのである。

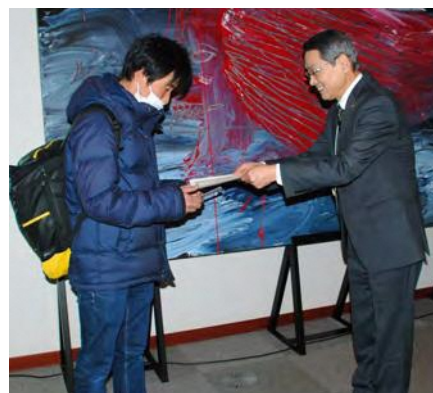
以上、韓国における著作権関連の画期と対応させながら、清張作品の翻訳状況を概観したが、本研究ではその他にも作品ジャンルや個別の作品ごとの特徴、そして出版形態や翻案の様相といった、様々な観点から分析や考察を行った。詳細については、第20回松本清張研究奨励事業の成果報告書をご参照いただきたい。



▲韓国で翻訳刊行された全書籍の表紙画像がスライドで上映された。なお当日は、金宰奭氏による発表の後、研究協力者の南富鎮氏(静岡大学教授・当研究会理事)による補足解説、共同研究者の李貞淑氏・金東鉉氏(いずれも慶北大学校)の紹介も行われた。

松本清張記念館
入館者150万人達成!

令和2年2月23日(日)、松本清張記念館の開館以来の累計入館者数が150万人に到達いたしました。記念すべき150万人目の入館者となったのは愛知県からお越しいただいた杉浦辰弥様でした。北九州市で開催されるライブイベントに参加するため来北されたとのことでした。杉浦さんには勝原館長から認定証と記念品が贈られました。



昨年10月に実施したイベントの様子

松本清張記念館の
中庭利用について(ご案内)

昨年、施設の魅力向上事業を行い、中庭でミニコンサートや朗読劇等が実施できるように、ステージ等の備品を充実しました。

文化や芸術の振興につながる内容で、記念館にふさわしい行事については、中庭をご利用いただけます。利用を希望される方は松本清張記念館事務局(093-582-2761)までお問い合わせください。



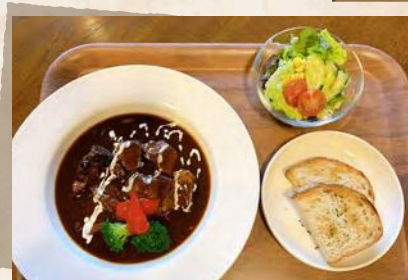
静聴カフェ
SEICHO Café からのお知らせ



新メニュー「ビーフシチュー」1,000円(税込み)

NEW MENU

お客様からのリクエストが多かった「ビーフシチュー」がメニューに変わりました。まろやかで風味豊かなデミグラスソースで仕上げています。パンかライスをお選びいただけます。



16:00以降のご利用も承っております(要予約)
夜の中庭の景色もお楽しみいただけます。
お時間やお料理についてお気軽にご相談ください。



北九州市小倉北区城内2-3(松本清張記念館内)
PHONE/090-4986-9135 営業時間/10:00~16:00
定休日/松本清張記念館休館日(12/29~12/31、館内整理日)

雑誌「新青年」

雑誌「新青年」は、大正九（一九二〇）年〜昭和二五（一九五〇）年に博文館から刊行された雑誌である。当時、同世代の多くがこぞ読んで読んだ。

その頃、雑誌「新青年」は海外に拓殖する青年層を目標にしたような雑誌だったが、臨時増刊号にはいつも外国の探偵小説を特集した。これが面白くて私はむさぼり読んだ。はじめて探偵小説の面白さを教えられたのは、これらの翻訳小説からだ。今は名前が消えたが、ヒーストンが活躍していた。浅野玄府、森下雨村、平林初之輔、牧逸馬などの訳者の名前を、今の流行作家のようになじんだものだ。私が十七、八歳の頃である。

（略）
実際に、日本にも本格的な探偵小説作家が出たと驚嘆したのは、江戸川乱歩の出現だった。『二銭銅貨』『D坂の殺人事件』『心理試験』『二廢人』『赤い部屋』などが続々発表されて、私は夢中になった。大変な天才が現れたと思った。

松本清張「推理小説の魅力」

清張が述懐しているとおり「新青年」は海外の探偵小説を日本の読者に紹介することに貢献し、さらに日本推理小説の父・江戸川乱歩という小説家を生んだ。

当館で展示している「新青年」を見ても、その新鮮で胸躍る雰囲気伝わってくる。この「新青年の顔」である表紙を長年手掛けたのが松野一夫（一八九五〜一九七三）という画家で、偶然にも清張と同じ小倉出身であった。松野は「西洋人の顔や現代風俗を描かればそれに比肩する者がいない」と評され、雑誌の魅力を最大に引き出した。歴史小説作家としてスタートした清張が、後に推理小説で大きく飛躍したことを考えると、「新青年」という雑誌の影響が大きかったことは言うまでもない。

（学芸員 柳原暁子）



点描 作品の舞台を訪ねて 「鷗外の婢」① 門司

「鷗外の婢」は昭和四四年九月から三月に「週刊朝日」に掲載された推理小説。

執筆家の浜村幸平は、明治・大正期の文豪についての「考証」を主な仕事としている。ある総合雑誌からの依頼で、鷗外が九州・小倉に赴任した時代に雇った女中について書くことを思いつき、鷗外の「小倉日記」を読み直す。鷗外が二番目に雇った女中の木村モトは、明治三三年九月から明治三三年二月まで鷗外の家で働き、その間の明治三三年四月四日に女児を出産した。浜村は、女中運に恵まれなかった鷗外が信頼を寄せていた木村モトのその後に関心を持ち、モトの縁者を訪ね歩く。浜村は門司に向かい、木村モトの姉夫婦の戸籍を調査した。モトは姉夫婦の養子となっており、また、夫婦には長男と一女・ミツ（明治三三年四月三日生）がいることがわかった。しかし、モトが産んだ女児については何の情報も得られなかった。

とにかく、これで木村モトの手蔓は切れた。籍にはいない、うちに他家に出た子のことなどわかりようはない。浜村は、そこから近い和布刈神社まで行った。すぐ前が下関で、渦を巻いている早瀬の下は隘道となっている。岸の上に腰をおろして、ぼんやりと煙草を喫った。磯臭い風がくる。

（略）

浜村は、はつとなった。川村ミツの出生届出は、その月の十三日である。ミツはモトの生んだ子だったのだ。それを姉のどんが引き取って、自分ら夫婦の子として届け出たのである。

木村モトは、門司にいた姉夫婦川村正人とどんの養女となり、その生んだ女児は同じく正人の娘として戸籍に届出された。つまり、右の戸籍面では、モト母娘はどんの子とし

て姉妹ということになる。義理で気の染まぬ結婚をし、すぐに家出したモトと、その子のためにこの処置をとった姉夫婦の同情は、いかにも明治的だった。

浜村は、川村ミツの出生年月と、鷗外の日記とをつき合わせてこの発見をしたのに満足した。どんな些事でも「発見」は愉快なものである。

（文藝春秋「松本清張全集10」鷗外の婢より）

作品では浜村の考証の性向について、（決して学術的なものではない）（略）むしろ研究の好奇心から、学者が手を染めない、あるいは染めようと思っても学界の批判をうけそうなので躊躇している分野にどんどんはいってゆく。（略）したがって、彼の学術的になり、話題の豊富となり、展開の奔放となつて、在野の考証家の面目を発揮するのであると触れている。

今回はそのような浜村らしさが印象的な場面の舞台となつた門司を訪ねてみた。浜村が戸籍調査を行った区役所は昭和五年に門司市庁舎として竣工した。登録有形文化財となっているその建物は現在も門司区役所として利用されている。

和布刈神社の前に広がる関門海峡の下には、関門国道トンネルが整備されている。昭和三三年に完成した海底トンネルで、車道の下には人や自転車も通行できる人道を備えている。人道の長さは約七八〇メートルで歩いて五分ほどで対岸の下関に到着する。下関側の地上に出ると、みもすそ川公園があり、そこには清張の文学碑が建立されている。（村上美智代）



門司区役所庁舎（昭和5年竣工）



和布刈神社そばにある「観潮テラス」からの関門海峡の眺望



関門国道トンネル(人道)

研究誌「松本清張研究」 第二十二号発刊

特集 清張と東京

論文

「清張史観から見た日本の真相」……………中尾茂夫

座談会

「清張が描き出した『東京』」

……………阿刀田高・山本一力・山田有策

論文

「清張文学の土壌―地方・人―」……………松本常彦

「通勤する女たち」……………赤塚隆二

「清張と下関」……………中川里志

座談会

「これからの文学館のかたち」

……………ロバートキャンベル・十重田裕一・藤井康栄

エッセイ

「清張先生にもらったお小遣い」……………木俣正剛

「口伝―砂の器―」……………米粒写経

記念館研究ノート

「松本清張と愛蘭土文学、ケルト文化」……………柳原暁子

記念館だより 編集後記

友の会 活動報告

● 清張サロン

清張サロンでは、清張作品や清張に関する話題をテーマに、講師を招いてのお話や意見交換・参加者同士の交流を行っています。

第2回清張サロンは、清張生誕110年・ポー生誕210年記念特別企画展「E・A・ポーと松本清張」について、柳原学芸員による講演と企画展見学でした。既に企画展をご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、講演を聞き、また新たな視点で企画展を楽しむことができたようでした。会場内では特に、ポーの遺髪やポーの世界をイメージした撮影スポットなどが人気を集めていました。

参加者からは「この企画展がなかったらポーの作品を読むチャンスはなかったのかもしれない。いろんなジャンルの作品に触れられて楽しい」、「清張が少年期に読んだ雑誌などもよく調べて展示している。知られざる清張の一面を具体的に知ることができた」などの感想をいただきました。

第2回 清張サロン

- 日 時：令和2年1月30日(木) 14:00～15:30(参加者26名)
- 会 場：松本清張記念館 地階 オープンスペース
- テーマ：「E・A・ポーと松本清張」
- 講 師：柳原暁子学芸員



● 生誕祭

令和元年12月21日(土) 14:30～16:30(参加者68名)
北九州市立生涯学習総合センター

松本清張さんの110回目の誕生日を、友の会会員でお祝いする「生誕祭」を開催しました。今回は清張さんの誕生日にあたる12月21日に実施となりました。長崎外国語大学教授の加島巧先生に「2019年の回顧～平成から令和の松本清張」というテーマで講演いただいた後、友の会の小林慎也会長と一緒にケーキに立てた110の数字のローソクを吹き消していただきました。

各テーブルに配られたケーキとコーヒーで、歓談の輪も広がり会員同士の交流も深まりました。



● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申込は、松本清張記念館友の会事務局まで
TEL.093-582-2761



令和2年度
中学生・高校生

読書感想文コンクール

若年層に清張作品に親しんでもらうとともに、表現力を学び、豊かな心を育む契機となればという思いから始めました。
新時代を切り開く若者達へ、探求の人・松本清張の精神の伝達を働きかけるものです。

■ **応募対象** 全国の中学生・高校生

■ **課題図書** 中学生・高校生ともに下記から1作品

「**遠い接近**」(『遠い接近』文春文庫)

「**共犯者**」(『共犯者』新潮文庫)

「**左の腕**」(『佐渡流人行』新潮文庫)

■ **応募方法**

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので必要な人はコピーをおとりください。

■ **応募締切** 令和2年9月30日(水) ※当日消印有効

■ **選考** 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■ **発表**

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、11月中旬頃、本人と学校に通知し後日表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表する予定です。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■ **賞** (受賞人数等変更の場合もあります。)

○最優秀賞(1人)

○優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人)

○佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各1回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は〈特別賞〉として当館発行の「館報」掲載を予定しています。

■後援 西日本新聞社

●協力 モンブランジャパン

**応募先
問い合わせ**

〒803-0813 北九州市小倉北区内2番3号 松本清張記念館 読書感想文コンクール係
TEL 093-582-2761 FAX 093-562-2303 ※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

講演に行ってきました

日付	主催者・会場等
1/31、2/7	北九州市立年長者研修大学校穴生学舎研修

●編集後記●

2月23日に平成10年(1998年)8月の開館以来の累計入館者150万人を達成しました。多くの皆様にご来館いただき感謝申し上げます。今後も清張の人と作品を知っていただき、また、その業績を後世に継承していくため、これまでの活動の成果や課題を踏まえ、魅力ある事業を展開していきたいと思っております。(M.M)



ミュージアムショップからのお知らせ

記念館地階ミュージアムショップには、清張の本や当館発行の研究誌・図録はもちろんのことオリジナルグッズも販売しています。

ご来館の際は、是非、ミュージアムショップをのぞいてみてください。



■ クリアファイル 200円(税込み)
■ てぬぐい 500円(税込み)

新型コロナウイルスの感染拡大の状況などによっては、松本清張記念館の開館やSEICHO Caféの営業時間などが変更になる場合があります。



イラスト:山藤 章二

編集・発行
松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
https://www.seicho-mm.jp
制作 (株)ハーティブレーン

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)、館内整理日
- 観覧料 一般/600円(480円) 中高生/360円(280円) 小学生/240円(190円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分 小倉駅からはバスをご利用いただく便利です(小倉城・松本清張記念館前下車) 車: 北九州市都市高速、大手町ランプより5分

